

戦前合州国に留学した精神病学者たち (下)

——松原三郎、齋藤玉男、石田昇ほか——

岡田靖雄

三. その後の人達

その後合州国に留学した人の大部分は、第一次大戦中にはじめから合州国に留学した人である。

1. 丸井清泰

まずとりあげる丸井清泰きよやすについては、山村道雄「丸井清泰」(日本の精神医学一〇〇年を築いた人々・第三部)(臨床精神医学、第二三巻第九号、一九八四年)がある。丸井は一八八六年(明治一九年)三月二七日に神戸市に生まれ、第四高等学校をへて一九一三年(大正二年)一二月に東京帝国大学医科大学を卒業(銀時計拝受、青山内科にはいった。東北帝国大学医学専門部の精神病学担当教授候補を推薦する力は精神病学の呉教授にはなく、青山胤通は教室員の馬場辰二(一九一四年卒業)をおしたが、馬場はそれをこわった。かわって候補となったのが丸井である。丸井は東京府巢鴨病院で精神病学の研修をして、一九一五年一〇月東北帝国大学医学専門部講師、翌年三月同医科大学助教授に任ぜられ、東京帝国大学の精神病学教室を見学して、そこで研究に従事した。

そして一九一六年(大正五年)一〇月から満二か年の留学を命ぜられて合州国にわたった。一九一六年末にだされたと推察される杉田の通信(神経学雑誌、第一六巻第六号、一九一七年)には、「丸井清泰氏精神病学研究のため渡米の趣新聞紙

上にて承り候が多分ボルチモアのマイヤー教授の許へでも行かるゝならん乎」とある。合州国ならアドルフ・マイヤ、という当時の状況だったのだろう。そのとおり、丸井はマイヤについて、そこで脳組織学の研究をした。杉田のつづく「費府通信」（神経学雑誌、第一六巻第二号、一九一七年）にも、「丸井氏当夏一寸費府へ御来遊有之候一日その御研究のお話など親しく承り申候」とでている。合州国における研究成果としては『神経学雑誌』第一九巻第一号（一九二〇年）にのった「中枢神経炎。附膠質細胞内一新顆粒（ヌクレオプロテイド）様顆粒」ニ就テ」があり、これははじめ“Archives of Neurology and Psychiatry”第二巻（一九一九年）にのせられたということであるが、その掲載誌を確認できなかった（このほか、マイネルト核のシナプス構造、シナプス構造にたいする過度活動の効果、についてのイギリス語論文が一九一八年および一九一九年に発表されているということであるが、これもまだ確認していない）。丸井が膠質細胞原形質内にみいだした、一様な大きさの、ちいさい球状あるいは土塊状の顆粒はチオニン染色で莖色またはメタクロマーティシ・バゾフィールに染色されるもので、これは「丸井ぐらぬら」とよばれ、こののち東北帝国大学精神病学教室の主要研究対象となった。のちにみるように、マイヤがとなえた精神生物学は合州国で精神分析学がひろくうけいれられる基盤をつくったものであるが、丸井はマイヤのこの学説を留学中に攝取し、精神分析についても研究（おそらく文献上の）をしていたのだろう（つまり、その理論は学習したが、理念と技法とはまなばなかつた）。

丸井は一九一九年七月に帰朝し、九月に東北帝国大学教授に任ぜられ、精神病学講座を担当した。上記のように丸井自身によりまたその指導下で脳組織学の研究がすすめられた。日本で精神分析学説は、たとえば九州帝国大学の榎保三郎などによって紹介されてはいたが、その理解は表面的なものであった。マイヤのもとでフロイト全集を通読してきた丸井は、講義に精神分析学説をとりいれ、それによる治療をはじめ、また日本神経学会でも精神分析につき報告した。それにはたいしては、独自の神経質学説をたてその治療法を提唱した森田正馬がげしく批判し、丸井・森田の論争は一時期日本神経学会の名物だった。一九三二年（昭和二年）からは『東北帝大精神病学教室業報（精神分析学論叢）』も発行

しだして、一九四三年の第九巻にいたった。

丸井は一九四四年青森医学専門学校長を併任、一九四七年東北帝国大学教授を定年退官。のち一九四九年に弘前大学学長に就任、その在職中の一九五三年（昭和二八年）八月一九日に急逝した。六七歳。

ところで丸井は、一九三三年にヨーロッパ学界視察のさいに、ウィーンでフロイト門下のフェダーン (Paul Federn) により教育分析をうけてきた。とはいえ、かれの自由連想は誘導的な合いの手をいれるもので、本格的な精神分析をはずれていた。これらの点に疑問をもった丸井門下の古澤平作は丸井と衝突してそのもとをとびだし、一九三二—一九三三年とウィーン精神分析研究所に留学した⁽¹⁹⁾。日本における本格的な精神分析研究は第二次大戦後に、古澤およびその門下によりはじめられたのである。

丸井についてもう一つみのがしてならない重大な問題点がある。一九四九年八月におきた弘前医科大学教授夫人殺人事件につき丸井は犯人を「精神変質者や残虐性にとむサディスト」と推理しており、逮捕された那須隆氏を丸井は一〇分診察しただけで、「内心即ち無意識界には残忍性、サディズム的傾向を包蔵しており〔中略〕被疑者那須は少くとも、心理学的にみて本件の眞犯人であるとの確信に到達するに至った」という異例の精神鑑定書をかいた。懲役一五年の刑が確定した那須氏が仮釈放されたのちに眞犯人が名のりでて、逮捕後二七年半で那須氏に無罪の再審判決があった。それだけでない。丸井は、古生物学で当時として先進的にすぎる「異端」説（現在では公認されている）をとなえていた東北帝国大学教授松本彦七郎につき、診察しないで「変質性精神病殊ニ偏執病」の診断書をかき、それをよりどころに松本は一九三三年に休職処分になり、二年後に休職満期で退官した（松本子良『理性と狂気の狭間で』、比良子良・仙台市、一九八五年）。これらは、丸井が独断的で偏見のつよい人であったことをはっきりしめすもので、この点が、マイヤ教室でのかれの学習にも、その後の精神分析紹介にもおおきく影響していたことがうかがわれる。

2. 松本高三郎

松本高三郎については、佐藤壹三「松本高三郎」（日本の精神医学一〇〇年を築いた人々・第三部）（臨床精神医学、第一三卷第五号、一九八四年）がある。松本は一八七二年九月九日（明治五年八月七日）に千葉県多古の、一〇数代におよぶ医家の山口家にうまれた。第二高等学校（はじめ文科志望）から第五高等学校に転学。一九〇四年（明治三十七年）末に東京帝国大学医科大学を卒業。翌年一月精神病学教室にはいり医科大学助手。東京府巢鴨病院医師としての在職は、一九〇五年二月二〇日から一九〇七年九月一八日となっている。一九〇七年七月に東京市麹町区内幸町の松本家の養子となった。一九〇七年（明治四〇年）九月一三日千葉医学専門学校教授に任ぜられた、はじめての精神病学専任の教授である。

一九一七年（大正六年）文部省から合州国、スイス、イギリス、フランスへの二年間の留学を命ぜられ、二月一九日に石田昇（後述）とともに横浜をたつた。合州国ボルチモア市のジョンズ・ホプキンス大学でマイヤ教授ほかにつき、交感神経についての論文を同大学の雑誌に発表した。ついで一九一九年三月にイギリスにわたってロンドン市精神神経病理研究所でFrederic Mottにつき、早発性痴呆の病理についての論文を発表した。そのほか、生殖器と早発性痴呆との関係について二論文をイギリスの雑誌に発表したということであるが、これらの論文はどれも確認できていない。

ボルチモアでいっしょだった石田が後述のように一九一八年二月二日に同僚の医師を射殺する事件がおこった。松本がこの事件に関連して尽力したことは、松本の帰朝歓迎会記事（神経学雑誌、第一九卷第四号、一九二〇年）に「松本氏は滯米中石田長崎医専教授の悲劇に遭逢し石田氏のため極力事件の解決のため尽瘁せられたる関係より席上詳密に其の事件の経過を語られ」とあることからわかる。しかしこのときの松本談話は記録されておらず、松本もこの事件についての記録はのこしていないようである。この帰朝歓迎会は一九二〇年二月二日なので、帰朝は二月はじめか。

松本は千葉医学専門学校の大学昇格とともに、一九二三年四月千葉医科大学教授に任ぜられた。さらに一九二四年二月五日には学長に任ぜられて、学園の拡張整備に力をいれた。学長を一九二九年八月までつとめ、一九三三年（昭和八年）九月退官。一九五二年（昭和二十七年）七月一日死去、七九歳。

松本の仕事については、合州国留学の特別な影響をたしかめることができなかつた。

3. 石田昇

石田昇については秋元波留夫「石田昇——悲運の精神医学者」（日本の精神医学一〇〇年を築いた人々・第三部）（臨床精神医学、第一三巻第四号、一九八四年）がある。かれがおこした殺人事件については新資料もあり、それは「留学と精神疾患——歴史的考察——」としてべつにまとめた。

石田は一八七五年（明治八年）一月二五日仙台市の医家にうまれた。第二高等学校在学中から雄島濱太郎の筆名で短歌、詩、小説を発表しており、一九〇七年には『短篇小説集』を出版した。一九〇三年（明治三六年）一二月に東京帝国大学医科大学を卒業して、精神病学教室に入局した。医科大学助手と兼任の東京府巢鴨病院医員としての在職は、一九〇四年四月一日から一九〇七年七月二六日となっている。クレペリンの精神病学大系は、そのもとにまなんだ呉秀三によつて日本にもたらされたが、かれの『精神病学集要』第二版は各論の下巻が完結せず、下巻中の既刊部分は早発癡呆にはいたつていないので、呉はクレペリン体系を全面的に紹介しきつてはいない。石田が巢鴨病院在職中の一九〇六年一月一日にだした『新撰精神病学』はクレペリン体系による日本で最初の精神病学書であり、版をかさねるごとに改訂され、一九二二年の第九版にいたつた。

石田は一九〇七年七月二六日に長崎医学専門学校教授として赴任した。一九一七年（大正六年）一月一九日づけで合州国、イギリス、フランスへの留学を命ぜられた石田は、前記のように松本高三郎とともに同年一月一九日に横浜をたつた（石田不在のあいだの後任となつたのが齋藤茂吉である）。石田もボルチモアのジョンズ・ホプキンス大学のアドルフ・マイヤのところに行った。石田がどういふ研究をしたかは記録されていない。一九一八年六月四日づけの米国通信（神経学雑誌、第一七巻第一〇号、一九一八年）は、シカゴのアメリカ医学心理学会で名誉会員に推薦されたことだけをつたえている。そして二月二一日に石田は、見学中の病院の婦長が自分に恋愛しているのに、同僚の医員ウォルフが同婦長に

執心して自分を不利にみちびくとの被害妄想から、ピストルでウォルフを射殺した。裁判では、精神異常はあるが責任能力はあるとして、石田は終身刑を宣告された。五年間服役したのち病状が悪化して、州立精神科病院にうつされた。そののち、よくなったらまた合州国にもどって服役するとの条件で帰国をゆるされ、一九二五年(大正一四年)一月二七日に横浜につき、ただちに松沢病院に入院した。その後の状態はまぎれもない分裂病で、一九四〇年(昭和一五年)五月三一日肺結核で死去した、六四歳。

留学にともなう精神疾患には、異文化との接触による急性精神病もあるが、それは帰国後には急速に軽快するものである。石田はボルチモアで一週間ぐらいで下宿をとりかえていたという。巢鴨病院あるいは長崎では石田の言動に異常があったことは記録され・かたられていない。留学して間もなく分裂病が顕症したようである。そして、帰国後も症状の好転はみられなかった。

4. 植松七九郎

植松七九郎については保崎秀夫「植松七九郎」(日本の精神医学を築いた人々・第二部)(臨床精神医学、第一〇巻第八号、一九八一年)および塩入円祐「植松七九郎——老年精神病と老人斑——」(老年精神医学に貢献した人々)(老年精神医学、第二巻第六号、一九八五年)がある。¹⁵⁾植松は一八八八年(明治二年)十一月三日長野県諏訪郡の農家に生まれ、第一高等学校をへて一九一五年(大正四年)に東京帝国大学医科大学を卒業。翌年より同大学の三浦内科および精神病学教室に勤務。巢鴨病院医員としての在職は一九一六年一〇月五日から一九一七年九月一二日となっている。

一九一八年に合州国にわたってマサチューセッツ州立精神病院およびダンヴァース州立精神病院の病理学研究所に勤務し、一九二〇年にはポストン州立精神病院病理学研究所主任兼ハーヴァード医科大学神経病理学講師となつて、主として神経病理学(とくに老人斑)の研究をおこなつた。この間の主要な仕事は、老年精神病の病理に関するもので、帰国後の『The Journal of Nervous and Mental Diseases』第五七巻(一九二三年)に発表されている。

一九二二年（大正十一年）五月に帰国すると王子脳病院に勤務し、同病院付属ともいえる小峰研究所の理事となった。一九二三年四月下田光造教授のもとで慶応義塾大学医学部神経科の講師となり、翌年助教教授。一九二六年下田の九州帝國大学転出にともない教授。一九五三年（昭和二十八年）退職。その間に一九三〇年にはワシントンでの第一回国際精神衛生会議に三宅鑽一とともに日本代表として参加した。断種法案（一九四〇年に国民優生法として制定された）にたいし植松は金子準二とともに反対の論陣をはった。わが国の精神病学者の大勢は、断種の考え方には賛成で、断種法案が具体化してくると消極的賛成の態度をとった。そういうなかで植松および金子の当初からの反対は異色のことであつた。合州国は断種法の先進国であつたが、植松の断種反対がどういふものに影響されたかは確認できていない。

植松は、昭和医学専門学校（一九二八年）の創立（一九二八年）にも協力して神経科の主宰者となつた。また、東京市方面事業後援会が一九四〇年に開設した桜ヶ丘保養院（精神科）は慶応義塾大学と医務に関する契約をむすび、植松がその院長を兼任することになり、一九五七年までその職にあつた。さらに植松は一九四九年に設立された日本精神病院協会の理事長となつて、一九五三年までその職にあつた。なくなつたのは、一九六八年（昭和四十三年）五月九日であつた、七九歳。

一九三二年から年一回内務省主催で公立及代用精神病院協議会が開催されており、途中から精神病院協会と改称されていた。だが、一九三九年の第八回総会で高野六郎厚生省予防局長が会長にえらばれたことにみられるように、官主導のものであつた。これも一九四三年に精神厚生会に統合され、戦後に活動を停止してゐた。植松・金子の尽力でできた日本精神病院協会は、当時の私立精神科病院の大半が加入するものであつた。一九五〇年に成立した精神衛生法も、この協会の力によるところがおおきかつた。

植松の活動はこのように、ドイツ流の精神病学者とちがつて（呉秀三という大例外はあるが）、幅ひろい社会的活動もふくむもので、金子準二⁽¹⁶⁾という協力者がいたこともあつたとはいへ、合州国留学の影響もおおきかつたと察せられる。

5. 小峯茂之ほか

小峯茂之についてはその略伝が孫小峯和茂によって東京精神病院協会『東京の私立精神病院史』（牧野出版・東京、一九七八年）にかかれている。小峯は旧姓大島、一八八三年（明治一六年）一月二日神奈川県足柄下郡に生まれ、済生学舎をでて、一九〇五年一月医術開業試験に合格した。一九〇六年三月に王子精神病院（王子脳病院）に就職、また同年九月から一九〇八年二月まで東京帝国大学精神病学選科で研修、途中一九〇七年一月二日から一九〇八年一月二三日と東京府巢鴨病院医員。一九〇七年一月院主小峯善次郎の養女はると結婚、小峯姓となった。一九〇八年二月王子脳病院長、一九一四年小峯善次郎が死去し、院主兼院長となった。

小峯は一九一八年四月一九日に横浜をたつて合州国に留学した。留学先は杉田とおなじウィスタ研究所で、その助教授となつていた畑井新喜司をたよつたのである。そしてドナルドソンおよび畑井の指導下に、ダイコクネズミ脳の新陳代謝につき研究した。その結果は『比較神経学誌』の第三〇巻（一九一八年）から第三一卷（一九一九年）にかけて四篇の論文として掲載され、またその内容の一部分は『神経学雑誌』第一九巻第四号（一九二〇年）に掲載されている。小峯は一九一九年中頃に帰国した。同年九月二五日の東京精神病学会例会では「北米ニ於ケル二三ノ精神病院ノ患者作業状況及び其製作品供覧」の報告をしている（『神経学雑誌』第一八巻第一一号にのつている抄録の題名は「北米ニ於ケル二三ノ精神病院ノ患者作業状況」となつている）。ここで小峯は、合州国に比して日本の病院作業の設備がととのつていないことを指摘し、まず責任者である看護長に先進国の作業の現状を視察させることを提案している。

ところで王子脳病院は一九二三年一月二日に火災で病棟を半焼した。一九二五年四月二六日に小峯はそこに小峯病院および小峰研究所を創設した。小峰研究所は比較脳研究、自殺研究などをおこなつた。小峯は一九四二年一月一〇日死去、五八歳。

小峯はそれだけでなく、精神病院の実務を研究するため一九二〇年（大正九年）四月二一日に設立された精神病医協会（呉秀三会長）の設立・運営に関与した。一九二六年（大正一五年）一月一五日の日本精神衛生協会の設立、および一九

二七年一月からの同協会と一体の精神衛生学会の名での啓蒙誌『脳』の刊行にも関与した。『脳』は第一五巻から『精神と科学』と改題したが、小峯は一九四三年の第一七巻第一号まで発行人であった。さらに、まえの日本精神衛生協会とはべつもの公的団体となった日本精神衛生協会（会長はまえのものにつづいて三宅鑛一）にも関与した。こういった、臨床面にかぎらない幅広い組織活動が小峯の生涯の特色であった。

おなじころウイスタ研究所には永坂源一および水津信治すいづのぶはるの二人も留学していた。この二人の経歴は充分にはたしかめきれずにいるが、永坂は尾張藩医で漢詩人・書家として名のあつた永坂周（号石球）の息子で、一九一六年大阪医科大学を卒業。『神経学雑誌』第一六巻第一一号（一九一七年）にのつた杉田の「費府通信」に「永坂源一氏先般当地へ来られ費府に滞在せられ度御希望の由にて新学期より Spiller 教授の下にて脳病理学研鑽の併ら医化学技術講習をうけられなば如何かと存じその旨御勧め申上居候」とあるが、永坂が実際にどういう研究をしたか、その成果はのこされていないようである。永坂は一九一八年六月一八日帰国。一九二三年三月一日から一九二四年八月一九日と東京府立松沢病院医員だった。水津は一九〇九年（明治四二年）京都帝国大学京都医科大学を卒業し、一九一〇年一月一七日から一九一一年一月一六日と東京府東鴨病院医員。私宅監置調査では一九一一年に静岡県を担当した。一九一一年一月から朝鮮総督府医院精神科科長。同院での精神病学教育も担当しており、一九二六年同院が医学専門学校になるにあたり教授兼任。水津は一九一八—一九二〇年とウイスタ研究所に留学。『比較神経学誌』第三二巻第一号（一九二〇年）に胼胝体発達と比較研究についての論文がのつている。水津は一九三六年朝鮮から日本にもどつて、その一月三日に防府脳病院を開設し、戦後まで活躍していた。

一九一七年一月には京都府立医学専門学校教授野田浦弼が合州国留学を命ぜられて出発しているが、留学先、留学期間はたしかめられなかった。

6. 村松常雄

戦前に合州国に留学した精神病学者はほかにもいたろうが、最後にとりあげるのは村松常雄である。村松は第一次世界大戦もおこなった時期に合州国留学をえらんだ。村松については堀要「村松常雄先生を悼む」(「精神医学」第二三巻第一二号、一九八一年)および高臣武史「村松常雄」(日本の精神医学一〇〇年を築いた人々・第三部)(「臨床精神医学」第一四巻第一号、一九八五年)があり、また村松常雄・佐藤彦三(対談)「社会精神医学の先達にきく」(「社会精神医学」創刊準備号、一九七八年、あとは「対談」と略記)で村松自身が自分の考え方、研究方向の変遷をかたつてゐる。わたしは一九七九年に一度その話しをうかがつてゐるが、そのときは松沢病院在職中のことが主であった。はじめの二文のうちでは高臣がアメリカ留学と一言かいてゐるだけであるが、戦後の日本精神医学の方向づけにあたえた村松の影響をかんがえると、村松の足跡はもつとこまかくたどられなくてはならない。ここにあげるのは、ごく簡単な素描だけである。

村松は一〇数代つづく医家の二男として東京日本橋に一九〇〇年(明治三三年)四月一二日にうまれた。第一高等学校をへて一九二五年(大正一四年)東京帝国大学医学部医学科を卒業。はじめは生理学をころざして相談にいった橋田邦彦教授にすすめられて、精神病学教室にはいった。一九二六年から一九三二年と東京府立松沢病院医員、一九三二年同医長。その間に横手社会衛生叢書に『精神衛生』(金原書店・東京、一九三〇年)をかいた(この内容は、いまからみるとそれほどには新味のないものであった)。

一九三三年からロクフェラ財団医学研究生として文部省在外研究生の資格で合州国に一年半、ドイツに半年留学した。合州国がえらばれた経緯ははっきりしないが、松原はドイツへの足がかりとして合州国をえらび、その後の人たちは第一次大戦のためにやむをえず合州国をえらんだのにたいし、これは精神病学者によるはじめての積極的合州国選択であった。ハワイおよびボストンの精神科病院見学記がそれぞれ『神経学雑誌』にのつてゐるが、そのあとの動きをつたえる記事はない。合州国でハーヴァード大学で髄液の蛋白質や多発性硬化症の臨床・病理などを研究した。「対談」では、「アメリカでこの『マイヤの』holistic dynamicの考え方を知つて、わが意を得たものと思つた」、「昭和八年頃のアメ

リカ精神医学を特徴づけたのがアドルフ・マイヤーの説で、私より一〇年か二〇年くらい年上の教授連のほとんどはマイヤー学派であったですね」とかたる。マイヤー学説との出会いがどのような形でおこなわれたかはふれられていない。マイヤーに直接にあつてはいないのだろう。ドイツでは、ミュンヘンの脳研究所で病理標本をみた（対談）。

帰国は一九三五年八月一九日であった。村松は一九二七年に青木義作とともに東京市小学校補助学級児童の医学的研究につき発表していた（神経学雑誌、第二七巻第七号）が、帰国後の一九三六年五月に東京帝国大学医学部脳研究室に児童部を開設して診療にあたるなど、あたらしい社会的方向性をもった研究を開拓していった。児童部には精神科ソーシャル・ワーカーを一人おいたが、精神科ソーシャル・ワーカーとしては日本で最初であった（医療ソーシャル・ワーカーは聖路加病院にすでにおかれていた）（対談）。一九四〇年から一九四八年まで東京都立松沢病院副院長で、一九四五年から同梅ヶ丘分院院長を兼任した。当時の松沢病院長は、内村祐之東京帝国大学医学部教授の兼任で、村松は戦中・戦後のくるしい時期の病院経営、なかでも食糧確保に苦勞した。

国立国府台病院は、国府台陸軍病院（精神科）をひきついだもので、精神科が半分をしめる総合病院になっていた。一九四八年四月ここの院長になった村松はそこに「国立精神衛生センター」の看板もかけて、研究部と病院部とをそこに置くことを計画した。精神科分院は大型の児童病棟としてそこに精神科ソーシャル・ワーカーを一人おき、一般科には医療ソーシャル・ワーカー一人をおいた。病院の一角に一九五二年に国立精神衛生研究所がつくられたが、病院は医務局、精神衛生研究所は公衆衛生局という縦割りを打破することはできず、病院・研究所の一体化という村松の基本構想は実現されなかった。しかし、研究所には精神科医だけでなく、心理学者、社会学者、ソーシャル・ワーカーも肩をならべるなど、村松の考え方の一部分はいかされ、国立精神衛生研究所は日本の当時の生物学的主流とはちがった、社会的・心理学的方向性をつよいものとなった。

村松は一九五三年から一九六四年まで名古屋大学教授をつとめ、そこでの研究は社会学者、臨床心理学者、文化人類

学者などと協力しておこなわれた。児童精神医学にもおおくの関心がはらわれた。村松がねらったのは、holistic-dynamic orientation と multidisciplinary approach とであった。一九六四年から一九七一年と国立精神衛生研究所所長。まへの『精神衛生』は、『精神衛生』（南山堂・東京、一九五〇年）、『新精神衛生』（高臣武史と共著、南山堂・東京、一九七八年）と、内容を完全にあらためた著書を同一主題について三回かいて、その理念の進展をみせている。そして一九八一年八月三〇日死去、八一歳。

村松が合州国でマイヤの理念とどういう出会いをしたか解明しきれないことは残念であるが、帰国後にはその理念の実現に一歩ちかづいた。そして戦後には、マイヤ的なアメリカ精神医学の理念であったものを日本の精神科医療のなかである程度実現させ、精神科医療のあたらしいあり方の先鞭をつけた。その点で村松は、もつとも実りある合州国留学をしてきた精神病学者といえよう。

上記のほかにもヨーロッパ留学の帰途などに合州国の関係施設を時間をかけて見学したといった人は、何人かいた。

四・まとめと考察

1. 一一名についてのまとめ

合州国留学の具体的内容につきまತ್ತくたしかめられなかった野田をのぞくと、とりあげたのは一一名である。第一次世界大戦前に合州国に留学したのは松原一人で、それもはじめはドイツへいく足がかりのつもりであった。第一次世界大戦中からその直後にかけては九名で、うち二名ははじめドイツに留学していた。大戦後の留学は一名である。留学費用は公費（推定をふくむ）が五名で、私費五名、一人はロクフェラ給費であった。主たるついた人もしくは留学先は、アドルフ・マイヤが五名で、ウイスタ研究所四名、ハーヴァード大学二名である。留学先での研究主題は、神経病理学・神経組織学・比較神経学が七名、神経化学が二名、不明二名である（村松のばあい中心主題がはっきりしないが、髄液化学

をとって神経化学とした)。現地で臨床研究を発表した人はいなかったが、現地での臨床研究をのちに論文にまとめたのは松原である。

合州国留学が帰国後のその人の活動にどう影響したか、分析することはむずかしい。はっきりしたものをあげると、松原の精神疾患についての考え方（分類、経過などにつき）、丸井の精神分析学説、村松の holistic-dynamic orientation および multidisciplinary approach、齋藤の社会精神医学面の発言、植松、小峯、村松の精神科医療、精神衛生の面での活動をあげることができよう。杉田、村松がともに児童精神医学の開拓者となったことも注目しなくてはならない。ただ松原のばあいその特色は帰国後年がたつにつれてうすれているようにみえる。また松原は、その臨牀的な見方に影響をあたえたともわれるマイヤの名を表にだすことはなかった。丸井ではその精神分析学説は、かれ独自の色のつよすぎたものであった。第二次世界大戦前には、これらの人たちを通じてのアメリカ精神医学の影響は総体としては、点在していたのであった。村松は第二次世界大戦後にはその特色ある理念をある程度実現でき、またそれがわが国の精神科医療・精神医学のあり方を転換させるきっかけの一つとなった。そこには、第二次大戦前には合州国に留学した精神病患者が少数であり、戦後にはアメリカ精神医学のおおきな波がおしよせてきたという時代風潮の違いが影響したのでらう。

なおここで、これらの人のあいだに比較的密な交流があったことも指摘しておいてよからう。齋藤は帰国後小峯の王子脳病院顧問をしばらくつとめた。植松もしばらく王子脳病院につとめ、また小峰研究所の理事をした。植松の主要な業績の一つは、齋藤がだした西ヨーロッパ語文の雑誌「La orientalia bulteno neuro-biologica」に発表されている。齋藤が自由な筆をふるった雑誌『脳』は、小峯が発行人となつていゝるものであった。もちろん、上記の人は東京帝国大学医学部精神病学教室の関係者であることから、上記のような交流はとるにたならぬことかもしれないが、すこし目だつのである。齋藤の東京神経生物学研究所からは、「La orientalia bulteno neuro-biologica」、「La neurologio klinika kaj sociala」

(本文はイギリス語で、要約はエスペラント語)、『La libraro de la Tokio Laboratorio neuro-biologia』が発刊された。いずれも一、二号でおわつたものだが、第一のもの編集者には植松がはいっている。のちに『Folia Psychiatrica et Neurologica Japonica』を発刊させる齋藤の志は、せまい日本国内にとどまらぬものであった。さらには、自分の病院に研究所を併設したのは小峯も同様であった。臨床と研究とを併立させてすすめようという構えを、二人とも合州国でまなんできたのだろうか。

2. アドルフ・マイヤ

さて、合州国では一一名のうち五名までがアドルフ・マイヤについている(また一人がマイヤの考え方に共鳴している)。そこには、マイヤに魅せられてそこに腰をおちつけ、しかもその仕事ぶり、人柄がマイヤにたかく評価された松原が、日本人の精神病学者をうけいれやすくする基盤をつくつたといえるだろう。同時に、現代アメリカ精神医学の父といふべきマイヤについてみておかななくてはまい。

Adolf Meyer は一八六六年九月一三日スイスに生まれ、ツューリヒ大学を卒業後ロンドン大学でまなび、A. Forst や J. H. Jackson の影響をおおきくうけた。ちやうにパリで J. J. Déjerine にまなんだのち、一八九二年合州国にわたつた。一九〇二年から一九〇九年までニューヨーク州立病院病理学研究所長、同時に一九〇四年から一九〇九年までコーネル大学の教授をつとめた。一九一〇年にボルチモアのジョンズ・ホプキンス大学医学部に新設された精神科の教授に就任し、一九一二年にそこに Henry Phipps Psychiatric Clinic を設立してそれを主宰した。ここでは、総合病院のなかでの精神科という面と外来治療とが重視されていた。一九四一年にジョンズ・ホプキンス大学を辞職。一九五〇年三月一七日死去、八三歳。かれの研究は脳の比較解剖学、脳の病理解剖学、器質精神疾患などが主であったが、途中から臨床精神病理学に転じて、「精神生物学 (psychobiology)」をとらえた。

マイヤは一九〇二年に Mary Potter Brooks と結婚した。松原の文章をなおしてくれた人である。かのじよは夫の仕

事にふかい理解をしめしただけでなく、患者の家庭を訪問してその生活を目でみ、患者をとりまくものにはたらきかけた。「アメリカ最初のソーシャル・ワーク」といわれるところであり、かのじよの仕事は夫の精神疾患観を發展させるにも力があつたのである。一九〇七年にマイヤはクリフォード・ビース (Clifford Beers、一八七六一一九四三) にであつてゐる。みずから心をやみ精神科病院でつらい体験をしたビースは、精神科病院改革の運動にとりくんだ。一九〇八年にコネティカト州精神衛生協会を、一九〇九年には全国精神衛生委員会を組織し、さらには一九三〇年ワシントンでの第一回国際精神衛生会議(植松が三宅とともに参加したもの)の開催にこぎつけた。ビースが目ざしたものに「精神衛生運動 (mental hygiene movement)」の名をつけたのはマイヤであり、ビースの運動にはマイヤのおおきな後楯があつた。杉田が一時ついた August Hoch も、この精神衛生運動に関係してゐた。

さて、マイヤの精神医学は常識精神医学 (commonsense psychiatry) とも称される。今風にいえば、心やむ人を生物—心理—社会的な存在、社会環境のなかで歴史をもつていきる心身統一体として、また心の病いをそういう人間のつまずきとして、みようというのである。かれの立ち場をもつともはつきりしめすのは、一九一五年の論文でかれがつかつた「精神生物学 (psychobiology)」の語である (もつとも、一部にいわれるようにこの語をつくつたのはかれではなくて、そのまえに Bernheim、Snell などもつかつてゐた)。精神機能と身体機能とは不可分な統一体をなしているとの立ち場から、精神現象ならびにその異常を研究していこうとするのが、それである。ここでは、個体と環境との関係が中心におかれ、環境のなかでの縦断的成長に注目する発生—動態的な (genetic dynamic) 過程が重視され、動きのなかの心 (mind in action) が追究される。

精神疾患についてマイヤは、クレペリンが提唱した疾患単位があまりに硬直したものであることを批判し、反応型 (reaction-type) としての分類を提案した。器質性、譫妄性、感情性、パラノイク、代理性 (substitutive)、精神神経症に相当) 、荒廃性 (deteriorated) の六型である。またかれの実践は、今日の社会精神医学、地域精神医学などよばれる方向に

おおきくふみだしていた。⁽¹⁷⁾

マイヤの精神病学はこうして、アメリカの動態精神医学 (dynamic psychiatry) の基礎をつくり、フロイトの精神分析理論をうけいれる道をひらいたといえる。しかしマイヤの常識はフロイトの無意識重視に批判的だった。かれののちの一時期あまりに分析的にかたむいたアメリカ精神医学には、マイヤは、それは自分の考え方とはちがうと、その行き過ぎをたしなめたことだろう。またこのマイヤ学説にてらしてみると、帰国後初期の松原の臨床研究がマイヤの影響をおおきくうけていたことは明白である (この点明言されていない)。

3. ウィスタ研究所

つぎに四名の精神病学者が留学したウィスタ研究所 (the Wistar Institute of Biology and Anatomy) につきみよう。⁽¹⁸⁾ これは、ペンシルヴァニア大学解剖学教授で合州国で最初の解剖学書“A System of anatomy for the use of students of medicine” (Phil., 1811) をあらわした Casper Wistar (一七六一—一八一八) を記念して、一八九二年に発足した。ここには各国の研究者があつまり、日本からも医師だけでなく、生物学者も留学した。初期の研究者のなかでは畑井新喜司 (一八七六一—一九六三) が有名である。⁽¹⁹⁾ 畑井は東北学院専門部理科を一八九八年に卒業し、翌年合州国にわたって動物学および実験神経学を研究し、一九一〇年ウィスタ研究所の専任講師、一九一四年同助教授、一九二〇年には教授となった。一九二一年には帰国して、東北帝国大学理学部に新設の動物生理学講座を担当する教授となった。実験神経学の柘植秀臣 (一九〇五—一九八三) も一九二九—一九三一年とここで研究した。

杉田、小峯ほかのおおくの日本人研究員を指導したドナルドソン (Henry Herbert Donaldson) については、杉田の項でのべたように、かれが評伝をかいている (ドナルドソン「東西医界先哲評伝」、医事公論、第一四一五号、一九三九年)。ドナルドソンは一八五七年ニューヨーク州に生まれ、イエール大学、ニューヨーク・カレジ・オブ・フィジシャンズ・アンド・サージヤンズなどでまなび、一八八六一—一八八七年とツューリヒのモノコフ (Constantin von Monakov) のもと

で神経学をまなんだ。そしてシカゴ大学で生物学的神経学の講座を開設するにあたってその教授としてまねかれた。一九〇七年からはウイスタ研究所に安住の研究室をえていた。『比較神経学誌』ではマイヤとともに編集者であった。一九三七年死去。わたしたちがウイスタの名でしるのは、ウイスタ・ラト（ウイスタ・アルビン）であるが、それはドナルドソンが所長グリーンマン（Milton J. Greenman）⁽²⁰⁾とともにそだててあげたものである。

4. 結論

日本人留学生に関係した人としてマイヤについてややくわしく紹介し、またドナルドソンにもすこしふれた。明治初期までの外国人医学者として、日本に渡来した人、またその著書がはいつてきた人が重視されるのは当然である。ところが、一九世紀末以降の外国の医学者となると、世界医学史の観点だけから紹介されているようである。日本でかかれる外国の医学者の伝記をよむと、日本人の留学生をそだてた人でもその点にふれられていることはほとんどなく、外国人がかいたものの焼き直しとおもわされることが多い。日本の医学史は日本独自の視点をもつとうちだしてよいのではないか。とくに、日本人の留学生をおおくそだてた人にもつと注目すべきことを主張したい。精神科でそういう人として、ウィーンのオーベルштаイネル（Heinrich Obersteiner、一八四七—一九二二）、スイスのモノコフ（一八五三—一九三〇）、そして合州国のマイヤがある。とくにマイヤは、おおくの日本人の精神病学者をそだてただけでなく、合州国の動態精神医学の礎石をおいたという点でも、二重に重要な人である。

留学に関しては、石田の項でふれたように、戦後とくに注目されるようになった留学生の精神疾患の問題がある。前述のように、この問題の歴史的展望をいつかこころみたい。

これら先人の合州国留学は日本の精神病学になにをもたらしたか。それは、この章のはじめに論じたところである。戦前にそれはおおきくはそだたなかったが、戦後に静的で宿命論的なドイツ精神病学の影響を修正する動態精神医学の方向としておおきく花ひらいた。そして松原をはじめとする先人はそのための土壌をととのえた。この戦前と戦後とを

つなぐ人として、とくに村松がいた。これがこの論文の結論となろう。

この論文の要旨は、金沢で松原三郎について報告してほしいとの寺畑喜朔先生のご要望にこたえるつもりで、一九九三年五月一六日に金沢における第九回日本医史学会総会（寺畑会長）で報告したものである。きっかけをあたえてくださるとともに資料をご提供くださった寺畑喜朔、資料探索にご助力くださった清原喜美子（金沢大学医学図書館）、資料を提供してくださった小峯和茂、松原三郎の諸氏に、また松原家墓所にご案内くださった松原病院職員の方に、心からお礼をもうしあげる。

注

(1) 「合州国」としたのは、もちろん“the United States”のことである。

(2) ここでは、精神科医がかいた伝記をおおく利用したが、対象となる人の生涯の基本的事項、たとえば生没の月日、主要職歴などを明記していないものがおおいことに、おどろいた。

(3) 『倂』は一九三七年に発行を予定されていたのが中止され、一九七七年に松原病院創立五〇周年記念として、当初の「倂集」に、青年期の遺稿（合州国留学初期の記録「回顧録」をふくむ）をあわせて発刊された。

(4) 『神経学雑誌』にのった松原の通信はつぎのようである、——①第三卷（第七号）、三四〇ページ（六月二六日づけ）、一九〇四年一〇月二五日発行（あと「発行」は略す、②第四卷（第八号）、三六〇—三六四ページ（教室あて）、一九〇五年一月五日、③第四卷（第一〇号）、五三四—五三六ページ（紐育府精神病院概況通信）、一九〇六年一月五日、④第五卷（第三号）、一五四—一六二ページ（米国通信）、二月二三日づけ）、一九〇六年六月五日、⑤第五卷（第八号）、四一七—四二〇ページ、一九〇七年一月五日、⑥第六卷（第八号）、四九六—四九八ページ、一九〇七年一月五日、⑦第六卷（第九号）、五五五—五六〇ページ、一九〇七年二月五日、⑧第七卷（第七号）、三三〇—三三三ページ（三宅鑛一あて「米国通信」）、一九〇八年一月五日、⑨第七卷（第一〇号）、六〇九—六一〇ページ（三浦謹之助、呉秀三あて）、一九〇九年一月五日、⑩第七卷（第二二号）、七三七—七三八ページ（二〇月七日—一〇月一日づけ計五通分）、一九〇九年三月五日、⑪第八卷（第一号）、四五—四八ページ（二〇月二日—一〇月二六日づけ計八通分、いくつかはおそらく三浦・呉あて）、一九〇九年四月五日、⑫第八卷（第二号）、九〇—九三ページ（二〇月二七日—一月三日づけ計九通分）、一九〇七年五月五日、⑬

第八卷(第三号)、一三二一—一三四ページ(十一月三日—十二月二日づけ計七通分)、一九〇九年六月五日。

- (5) 『十全会雜誌』にのっている松原の合州国からの通信はつぎのものである、——①第三六号、八三一—八五ページ(母あて一九〇三年一月五日—一九〇四年三月二〇日づけ一〇通あまりからの抜き書き)、一九〇五年一月一日、②第四二号、八九—九〇ページ(正月および五月一日づけ、八田あて二通)、一九〇六年一月一日、③第四三号、八三—八四ページ(一月六日づけ八田あて)、一九〇六年二月二八日、④第四八号、八一—九六ページ(一九〇七年七月一日—同八月一日づけ八田あて計二通、しばしば連日だしている)、一九〇七年一月一六日、⑤第四九号、八九—九三ページ(一九〇七年九月八日づけ八田あて)、一九〇八年一月二二日、⑥第五〇号、九〇—九六ページ(八田あて)、一九〇八年六月、⑦第五三号、二九—三六ページ(一九〇八年一〇月七日発八田あて「帰国略記」、一九〇九年三月三〇日。なお、第二九号、三三—三七ページ(一九〇三年一〇月一七日)にのっている一九〇三年九月二三日発十全会あて通信が、留学にあたっての当初計画をくわしくのべている。

- (6) 坂東三範は一八九五年二月一日に生まれ、一九一七年五月一日に金沢医学専門学校を卒業。生理学教室にはいつて一九一九年一月助教。一九二三年四月金沢医科大学附属医学専門部助教、一九二四年一〇月金沢医科大学助教。一九二八年二月助教を辞職して内科教室につとめ、一九二九年から開業。一九三八年ごろ死去(主として履歴書による)。

- (7) 息松原太郎氏は一九四六年五月一日この本をいりや書店でみつけたときのことを、「店頭デ本書ヲ見附ケタトキ私ハ急ニキョロキョロト廻リヲ見タ上デモウ一度シツカリ背文字ヲ読ミオズオズト手ヲノバシテ本ヲ取ツタガヤガテ盗ミデモシタカノヨウニ読上カードダケヲ店主ニ示シテ抱キシメルヨウニシテ本屋ヲ出タノデアル」とかき、坂東がこれを製本してのこしてくれたことへの感謝をしるしている。本書は現在金沢大学医学図書館に寄贈されている。

- (8) 松原が「特異的神経毒素」を研究していたとのマイヤの言(「梯」)からすると、松原は早発性癡呆の原因として内分泌異常や自家中毒につき研究して、否定的結論に達していたのでなからうか。

- (9) 芦原金次郎(姓は一般に「蘆原」あるいは「葦原」としるされているが、戸籍は「芦原」である)の病名については、慢性躁病説、分裂病説(早発性癡呆、妄想性癡呆、パラフレニ)とあり、結着していない。沈静しても誇大妄想の中心

はかわらず、しかもその内容はしばしば荒唐無稽で、また生活態度の乱れが目だっていた(かれをしる看護人は分裂病とみていた)。そこでわたしは分裂病だったとみている(岡田靖雄「将軍・芦原金次郎伝」『図書』第四八〇号、二四―二九ページ、一九八九年)。

(10) ここで「早発癡病」と松原がよんだのは、早発性癡呆である。

(11) 岡田靖雄編『精神医療 精神病はなおせる』(勁草書房・東京、一九六四年)でわたしは治癒概念につき検討した。分裂病はよくなっても性格変化がのこるから、分裂病に治癒はありえない、というのが当時の通説であった。身体疾患でも免疫面、癩痕、心理的記憶をみれば、治癒とは完全な旧状復帰ではありえない。治癒は臨床的・社会的概念であって、分裂病でも臨床的治癒、社会的治癒は可能である。この論を先進的なものとわたしは自負していたが、すでに松原が同様の説をのべていたことには脱帽せざるをえない。しかし、松原のこのいわば常識的な説は、まったく注目されずにきたのである。

(12) 『神経学雑誌』にのっている杉田のヨーロッパおよび合州国からの通信はつぎのとおりである、①第一三卷(第二号)、一〇九―一四ページ(呉・三宅・医局あて、一九一三年二月三〇日づけ、ベルリン)、一九一四年二月五日発行、②第一三卷(第一〇号)、四五〇ページ(呉・三宅あて八月一四日づけ、ロンドン)、一九一四年一〇月五日、③第一四卷(第七号)、一八九―二九〇ページ(呉・三宅・医局あて、ニューヨーク)、一九一五年七月五日、④第一四卷(第八号)、三三―一三三三ページ(三宅あて)、一九一五年八月五日、⑤第一六卷(第六号)、四一四―四一五ページ、一九一七年六月五日、⑥第一六卷(第一号)、七五四―七五五ページ(『費府通信』、一九一七年一月五日)。

(13) 懸田克躬先生にうかがう『流れ流され大学生生活五十年』。『呉秀三先生記念精神科医療史資料通信』、第二九号別冊、四ページ、一九九三年。

(14) 同右、一〇―一ページ、一九九三年。

(15) なお、塩入円祐「恩師植松七九郎先生を想う」『東京精神病院協会三十年史』二六〇―二八一ページ、牧野出版・東京、一九八〇年、は植松の手柄をこまかくえがきだしている。

(16) 金子準二は一九九〇年一月二一日岐阜県に生まれ、第四高等学校をへて一九一七年東京帝国大学医学部を卒業。翌年は

はじめ東京府巢鴨病院医員、のち東京府立松沢病院医長。一九二二年大阪府立修徳館館医。一九二三年東京警視庁衛生部技師（↓東京都技師）となつて精神科関係の行政を担当。一九二六—一九四九年と慶応義塾大学医学部講師、一九三一—一九五〇年と昭和医学専門学校・昭和医科大学教授。東京都技師は一九四八年に退職。一九五四—一九六二年と日本精神病院協会理事。断種法にたいして金子はもつともはげしく執拗に反対意見を表明した。金子はまた精神医学史についておおくの著をあらわした。一九七九年八月七日死去、八九歳。気骨の人であつた。

- (17) 日本でマイヤの学説を紹介しているものはおおくない。わたしがしる範囲でそれをあげると、丸井清泰『精神病学』（金原書店・東京、一九三六年）、内村祐之「オイゲン・ブロイラーとアドルフ・マイヤーの対照」（内村祐之『精神医学の基本問題』、一五九—一七八ページ、医学書院、東京、一九七二年）、西丸四方・大原寛路「アドルフ・マイヤーの早発性痴呆の力動的解釈」（『精神医学』第一六卷第一〇号、一九七四年）、近藤喬一「アドルフ・マイヤー——その生涯と学説」（荻野恒一・相場均編『現代精神病理学のエッセンス』、七五—九六ページ、ベリカン社、東京、一九七九年）がある。なお、野村章恒訳「アドルフ・マイヤー氏——早発性痴呆の概念の発達に就きて」（『神経学雑誌』第三二卷第二号、一九三〇年）でマイヤは、クレペリンの早発性痴呆概念までの歴史をのべていて、マイヤ独自の考え方にはそこにはまだうちだされてない。

- (18) ウイスタ研究所に関しては、とくに小峯和茂氏よりいろいろと資料をいただいた。

- (19) 畑井新喜司については荒保宏『大東亜科学綺譚』（筑摩書房・東京、一九九一年）にくわしい。

- (20) 呉秀三の外遊署名帳（医学文化館に呉家から寄託されている）には、一九二〇年一月二日フィラデルフィアにおけるグリーンマンの署名がある。呉が同年七月のパリにおける万国神経病学会に出席し、帰路合州国によつたときのものである。

（精神科医療史研究会・東京）

Japanese Psychiatrists Who Studied in the United States in Pre-war Years

by Yasuo OKADA

In pre-war years, the main stream of Japanese psychiatry belonged to the German school, and many eminent psychiatrists studied in Germany.

As far as I could confirm, eleven Japanese psychiatrists studied in the United States in pre-war years. The first one was Saburo Matsubara (1877-1936), who studied under Adolf Meyer during the years 1903-1908. Nine psychiatrists studied in the United States during the years of World War I or just after it. Five of them studied under Meyer, and four others at the Wistar Institute of Biology and Anatomy. The last one, Tsuneo Muramatsu (1900-1981), studied at Harvard University during the years 1933-1935.

In pre-war years, the seeds sown by them opened into very small flowers. But in post-war years, the seeds bore good fruit in the form of the introduction of dynamic concepts into Japanese psychiatry.